

変わらぬ悲しみ

看護師として持ち帰った

大阪府堺市の看護師、佐藤正一(47)は「悲しみが変わっていない人との出会いで、人生が変わった」と言う。

2014年夏、車で東北の被災地を巡った時に、宮城県女川町の海沿いの更地で声をかけてきたのが、田村孝行(61)＝宮城県大崎市＝だった。孝行は「ここに銀行があって、屋上に逃げた行員12人が犠牲になった」と話し、その1人が長男の健太(当時25)だと告げた。

子を失った親が自ら防災を訴える姿を見て、「メッセージを持ち帰らないとあかん」と感じた。

勤め先の病院で携わるのは透



「ほわほわセンター」の職員たちと避難経路の確認をする佐藤正一さん(右)＝4月26日、大阪府和泉市

析治療。水と電気が必要で、災害に弱いとされる分野だ。知り合いの看護師たちと対策を話し合うようになった。

孝行と妻の弘美(59)の元をたびたび訪れ、17年に防災士の資格を取った。夫妻の願いを少しでも広げようと考えた。「なんとしても失われた命をいかさないと、と必死だった」

だが、防災対策には費用や時間もかかるうえ、災害が起きるまで、備えのありがたみは実感しにくい。「提案しても、上司に興味を持ってもらえない」という声も耳にする。

今年4月26日、佐藤は障害者グループホーム「ほわほわセン

ター」(大阪府和泉市)の防災研修に講師として参加した。代表の宮崎充弘(50)から依頼され、2年前から防災アドバイザーを務めている。

議題は、地震時に重度知的障害がある入居者らと近くの小学校に避難する際の課題の洗い出しだ。

「ブロック塀が意外と多いね」「避難の途中でどこのトイレを利用しようか」。職員6人との議論は1時間以上続いた。

今年に入り、別の障害者向け作業所からもアドバイスの依頼がきて、手応えを感じつつある。「全ての企業が防災に関心を持つなんて理想論やと思う。でも、必要としている組織があれば支援を続けたい」

(福岡龍一郎)